

臨時創刊号

ひろ

し

ま



か

さんせ

い

たかなし じょうじ

## 音戸の瀬戸～広島県呉市

音戸町鰯浜を歩いた。風景は変わらない。

僕は音戸大橋が架かっていない時も知っている。父の母の故郷は音戸町田原だった。父はよく僕を田原に連れて行っていた。その家は幼稚園で、後に寺を持たない浄土真宗の布教師の家であることを聞いた。父の父は広島の浄土真宗の寺の住職だった。僕は父の父も父の母も知らない。彼らは1945年8月6日に魂までも溶かされてしまった。僕にとって、祖母でも祖父でもない

。当然存在すべき歴史を消し去った事実と事実に至る道を僕たちは忘れてはいけない。

第二音戸大橋の工事も進んでいる。来年の春に完成予定だ。1961年に完成した今の音戸大橋は最初は有料で、建設経費を有料道路として使用者から回収し、回収後、無料にするという計画の元に建設され、無料になった。日本道路公団が赤字になったのは、回収不可の道路を作ったからだ。日本道路公団の設立趣旨が揺らいできたことも今回の事故につながるのではないかと考えている

。現在の橋は歩行者も通行できる。ただ、あのループ橋を渡る歩行者はいないので、渡し船も健在だ。独特の風景が維持されているのがうれしい。鰯浜を舞台にしたテレビドラマに娘が出演したことを思い出した。「帰郷」というドラマで荻野目慶子の娘時代の役だった。父親は高松英郎だった。20年以上前のことだった。

清盛塚も昔のままだ。音戸の瀬戸を一日で切り開いたといわれる平清盛が人柱の代わりに一字一石の経石を海底に沈め難工事を完成したことを称え、1184年に建立された。

常夜灯も昔のままだけど、2008年に復元されたものだそうだ。以前の常夜灯は元々、もっと沖にあり、昭和30年代の音戸の瀬戸改修工事の際に、現在の位置に移されていたものが老朽化し、撤去されていたのだ。清盛の時代からあったとされているが、もちろん、その頃の物は残っていない。清盛の日招き伝説は有名だけど、清盛の時代から、この瀬戸は船の航行できる水深があり、清盛は航路を開いたということが真実だ。



## 不老の道～岡山県都窪郡早島町

ある案件で岡山県の早島町に通っている。早島町は面積7.6km<sup>2</sup>の小さな町なのだが総人口2,000人以上をk添え、人口密度は県下最大なのだ。岡山市と倉敷市のベッドタウンとなっているのがその主要因だ。

その名の通り、かつては島で干拓により地続きとなり、かつてはイグサの栽培とそれにとまなう畳表製造が重要な産業だったが現在では衰退している。

ということは平成の大合併で倉敷市と合併することは住民の希望だった。ところが議会が合併に反対した。本来ならありえない話なのだが早島町なら納得がいく話なのだ。

この町では徳川幕府の旗本戸川家の支配がいまだに続いている。早島町長は、早島戸川氏時代の  
大庄屋や豪商などの有力農民・町人（片山家・大崎家・寺山家・溝手家・大森家・佐藤家・増成家など）の子孫が就任するケースが多い。前町長は佐藤家の出であり、三代と四代前の町長は大崎家の出である。

戸川達安は宇喜多家の重臣であったが、宇喜多家臣団の内部抗争で追われ、江戸に蟄居する。徳川家康による庇護を受け、関ヶ原では東軍につき、備中国賀陽・都宇に2万9千石を与えられ

、早島戸川家の祖となった。戸川家はその後旗本となり早島には知行所が置かれた。江戸時代より、行政を司った有力者が現在でもこの町を牛耳っている特殊な自治体だ。江戸時代後期に金比羅詣でブームが起きると、この地は四国に至る金比羅往来として栄えた。道標で当時の繁栄を偲ぶことができる。

早島をとおり、現在でも瀬戸大橋が四国につながっている。金比羅往来は現在でも早島町にあるのだ。

宇喜多堤も残っているが、近代の干拓の歴史も市内を歩くと偲ぶことができる。

『不老の道』と名付けられた景観を楽しめるルートが整備されているのもうれしい。

仕事としてはやりにくい面もあるのだが、この小さな町に江戸時代からの行政が持続していることに興味がある。次回、訪問時に、支配の歴史をじっくりと調べてみたい。案外、ここに日本の改革のヒントがあるのかもしれない。



## 日本民族は地中海にいた！？

---

気になっていた文献を読んでいる。明治時代は男女のスキャンダルの歴史の観点からとらえても面白い時代だ。

明治34年、歌人、与謝野鉄幹は妻と離縁し、愛人、鳳晶子と結婚しようとしていた。文化人としての地位を確保していた鉄幹にとっては致命的なスキャンダルなのだが、情熱の女晶子は優柔不断な鉄幹の態度は許せなかった。周囲の理解を得られない二人の恋の救世主が木村鷹太郎だった。バイロンの紹介者で日本で初めてプラトン全集を漢訳した木村は鉄幹の友人であり、見るに見かねた彼が二人の媒酌人となった。日本近代文学史の恩人でもあるのだ。

木村鷹太郎のことを知っている人は少ないと思うのだが、この人の研究していた古代ギリシャ文学は彼の思想にとつてもない影響を及ぼした。日本神話とギリシャ、ローマ神話の共通点を見出し、言語的にも古代ギリシャ語と日本語の共通点の類似性に関する論文を発表した。その延長上に今までの歴史が間違っていると指摘し、1911年に『世界的研究に基づける日本太古史』を発表し、新史学という学問を世に問うた。

多くの人が一笑に付した新史学の内容を読むと彼の精神状態を疑ってしまうのだが、歴史のロマンに、彼の言葉を信じたい僕がいるのも確かだ。

日本語はラテン語、ギリシャ語と同系であり、日本民族は地中海から移動した。その移動の歴史が真の日本史であり、後年、それが日本列島内の歴史として改ざんされたのだ。イタリア語のブラボーと江戸っ子のべらぼうは同じ言語である。イタリアのベニス日本の潮来をまねて造られた都市だ。古代ギリシャの哲学者とその思想は日本の高僧と同一だ。アネクシメネスは最澄だ。ヘラクレイトスが空海で、デモクリトスが法然、プロタゴラスが親鸞、ソクラテスが日蓮だ。シェークスピアの業績は近松門左衛門の業績だ。

愛媛県宇和島の出身で東京帝国大学を卒業した天才、木村が真面目に研究をしていたのだ。彼の誤りを指摘することも文献でしかできない。歴史学は現在的事実ではないのだ。

彼に思想的意図があるとは思えないので、真面目な研究者なのだ。

与謝野夫婦とのその後の交流はわからないのだが、当然、彼らにもこの研究は耳に入っているものと思われる。

木村鷹太郎の研究者は広島県呉市の大和ミュージアム館長の戸高一成だ。今度、お邪魔したときに館長に木村の話聞いてみよう。

## 夜神楽～広島市東区山根町尾長天満宮

日本全国で秋祭りが行われている。被災地でも未来を信じ、実りの秋に感謝する祭りが行われている。信じるべき未来を信じられない未来に転化しようとしているとしか思えない現政権には怒りを覚えるのだが神の存在を信じ、神の前で収穫を感謝しよう。

広島では今秋から秋祭りの本番を迎える。今週のなかくんち、来週のおとくんちを迎え各神社で祭りが行われる。秋祭りは収穫祭だ。各神社で神楽が奉納される。神楽はこの時期に行われるものだった。一年間のつらい農作業が実りの秋を迎え、すべてが報われる。この夜は神と人が一体になる無礼講だ。祭りの夜は道德の鎖からも解き放たれた。今ではそんなことはできないが、秋祭りの夜は特別だ。

僕は、できる限り、各神社をまわり、夜神楽を楽しむことにしている。今夜は尾長天満宮に行った。この神社では安野神楽団を呼ぶ、中国山地の各町村では神楽団が多数、存在し、伝承に努力している。彼らの日々のつらい練習もこの秋祭りで報われるのだ。

最近の神楽は創作神楽やスーパー神楽があり、神楽ブームの中、『見せる神楽』に指向しているが、神楽は神に奉納するもので、舞台芸術ではないことを意識しなければならない。安野神楽団は加計町（現在の安芸太田町加計）にあり、百余年の歴史をもつ神楽団だ。本来の神楽を伝承することに尽力している。

昔のように、地元では生活できないので、広島市にで生活している人も多いのだが、週末には地元に戻り、練習を続けている。僕は仕事が終わって行ったのだが、最後の二演目『大江山』『八岐大蛇』を見ることができた。本来は長い話なのだが、『大江山』は坂田金時、渡辺綱が酒吞童子と茨木童子と闘い、茨木童子の腕を切り落とす場面、『八岐大蛇』はスサノオが八岐大蛇を倒し、天叢雲剣を取り出す場面を中心に編集されていた。いずれも石見神楽の代表的演目だ。神楽が終了したのは10時過ぎだった。まだ多くの子供たちが残っていた。彼らはこの日本の財産を次世代に伝承してくれるだろう。神社と祭りが彼らの原風景に刻まれることを祈っている。

